

1.需給動向

1-1.世界の需給動向

インジウムの最大の用途はFPDの透明電極向けのITOターゲット材である。インジウムは亜鉛の副産物として生産されるほか、ITOターゲットから回収され再生されるものもある。一般的に、亜鉛の副産物として生産されるものを新地金、ITOターゲットなどから回収されるものを再生地金と称する。

世界のインジウム新地金生産量を表1-1、図1-1に示す。2014年の生産量は前年比103%の820tであった。世界の新地金生産量に占める国別シェアを見ると、中国が全体の51%を占め、次いで韓国が18%、日本が9%、カナダが8%、フランスが6%、その他と続く。

インジウム新地金は中国で投機取引の対象となっており、中国で生産されたメタルは実市場に出回るのはなく中国の民間取引所の倉庫に在庫される。中国でインジウムを扱う取引所としては、泛亜有色金属交易所(Fanya Metal Exchange、以下、Fanya)、無錫市不銹鋼電子交易中心(China Stainless Steel Exchange Co., Ltd)、天府商品交易所(Tianfu Mercantile Exchange)があるが、最も規模が大きく、取引の中心となっているのはFanyaである。

中国におけるレアメタル投機熱の盛り上がりと共にインジウムの投機的取引も過熱し、2015年7月末時点で5,000tの在庫キャパに対して、実在庫は3,609tに達し、政府により取引停止の措置がなされた。その結果、市場での取引価格が下落し、ITO生産会社の仕掛品に評価損が生じるなどインジウム関連業界に影響が出ている。

世界生産量2位の韓国では2012年の生産量が前年比倍以上に拡大したが、2011年の東北大震災により日本からのITO供給が不足し、韓国が国産化、産業強化の施策を進めた結果である。日本の新地金生産者は、DOWAグループ関係会社の秋田レアメタルのみで、他は再生地金を扱っている。

再生地金は主にITOターゲット材料からインジウムを再生する。インジウムの主要用途であるITOターゲットは酸化インジウムにスズを添加した化合物を円筒形や板状の塊としたもので、LCDやタッチパネル電極などで導電材として使用される。一般的にITOメーカー(ターゲットメーカー)からユーザーである成膜メーカーに供給され、成膜メーカーでガラスやフィルムにスパッタリングされるが、装置の制約などで実際に成膜されるのはターゲット材の30%程度であり、残り70%はターゲットとして残る。ユーザーはこれを使用済み品としてITOメーカーに返却、ITOメーカーはインジウムメタルに精製して再びターゲットとして供給する。そのため、ITOターゲット材用途での新地金使用量はさほど多く無い。ITO生産企業内における回収以外に、専門メーカーにより回収・再生がなされる。インジウム価格暴落により、ITO生産企業は回収・再生コストの販売価格への転嫁が困難になり、回収・再生専門メーカーの価格競争力は失われる。以前は日本の世界ITO産業に占める割合は極めて高かったが、現在の世界シェアは、日本50%、韓国30%、中国10%、欧米系その他が10%位と推察される。

表 1-1 世界のインジウム新地金生産量

	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	14/13比	構成比
中国	292	262	183	310	280	340	380	405	415	420	101%	51%
韓国	34	70	90	75	70	70	70	165	150	150	100%	18%
日本	70	73	70	65	67	70	70	71	72	72	100%	9%
カナダ	82	90	90	45	40	67	75	62	65	65	100%	8%
フランス	—	—	—	—	—	—	—	—	33	48	145%	6%
ベルギー	30	35	35	30	30	30	30	30	30	30	100%	4%
ロシア	7	12	12	12	4	—	—	13	13	13	100%	2%
ペルー	5	5	5	6	25	—	—	11	11	11	100%	1%
その他	32	42	51	27	30	32	35	25	10	10	100%	1%
合計	552	589	536	570	546	609	662	782	799	820	103%	100%

出典: United States Geological Survey「Mineral Commodity Summaries Indium」 World Refinery Production

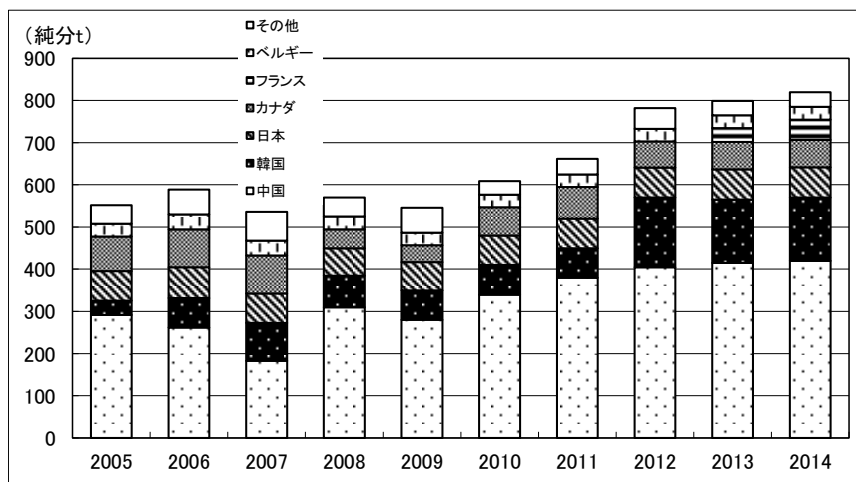


図 1-1 世界のインジウム新地金生産量

1-2.国内の需給動向

インジウムの国内需給を表 1-2、図 1-2 に示す。2014 年の国内インジウム供給量は、国内の新地金生産、輸入(新地金+スクラップ)、国内再生地金合計で前年比 101%の 807t であった。新地金及びスクラップの輸入量は前年比 103%の 166t、国内における再生地金生産量は前年比 101%の 569t となった。

主要用途であるITO ターゲット材は 2011 年 3 月に発生した東日本大震災の影響により、日本国内のターゲットメーカーが一時期生産をストップせざるを得ず、主力市場である中国、韓国、米国をはじめとする海外市場で一時期品不足となった。日本製ターゲットを調達できなくなったメーカーは韓国からターゲットを調達するようになり、特に韓国国内の大手 LCD パネルメーカーは韓国の国策である「Buy Korea」もあり、韓国製ターゲットの採用を推進した。そのため、使用済ターゲットならびに海外工場で発生する工程内スクラップを回収する国内ユーザーも減少傾向となり、海外からの地金及びスクラップの輸入減少の要因となっている。

国内需要に関する公開データはないが、日本の需要は世界需要の 50%程度と推察される。2014 年の国内需要については ITO ターゲット向けが前年比 101%の 626t の微増で、内需全体も前年比 101%730t と同様の傾向であった。

日本国内における ITO ターゲットの消費量は TV の台数削減などにより大きく縮小するとの見方もあったが、TV 画面サイズの大型化やスマートフォン、タブレット端末などタッチパネル搭載製品の拡大により、当初懸念されたほどには減っていない。ただ、ITO ターゲットは世界的に供給過剰な状況にあることに加え、LCD パネルの一大生産拠点である中国で部材の国産化が国策として進められ、ITO ターゲットも国産化に向けた研究開発が進んでいることから、今後も国内需要は横ばいから微減での推移となるものと考えられる。

表 1-2 インジウムの国内需給

単位: 純分t

		2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	14/13比	
供給	国内生産(新地金) ¹⁾	70	73	70	70	50	70	70	71	72	72	100%	
	輸入(輸入地金+スクラップ) ²⁾	422	434	368	342	215	417	494	171	161	166	103%	
	スクラップ	313	514	593	488	537	603	587	558	523	528	101%	
	再生(再生地金) ³⁾	17	30	30	29	27	34	38	40	40	41	103%	
	小計	313	544	623	518	564	636	625	597	563	569	101%	
合計		805	1,050	1,060	930	829	1,123	1,189	839	796	807	101%	
需要	ITOターゲット ³⁾	504	790	790	751	826	908	929	866	620	626	101%	
	その他	ボンディング	46	60	65	—	—	—	—	—	—	—	—
		化合物半導体	7	9	9	—	—	—	—	—	—	—	—
		蛍光体	8	8	8	—	—	—	—	—	—	—	—
		低融点合金	12	8	8	—	—	—	—	—	—	—	—
		電池材料	5	5	5	—	—	—	—	—	—	—	—
		ベアリング	1	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—
		歯科材料	3	3	3	—	—	—	—	—	—	—	—
		その他	4	4	4	—	—	—	—	—	—	—	—
		小計	86	98	103	110	102	118	153	59	102	105	103%
		小計	590	888	893	861	928	1,026	1,082	925	721	730	101%
輸出 ²⁾	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	—		
合計	590	888	893	861	928	1,026	1,082	925	721	730	101%		

出典: 1) United States Geological Survey「Mineral Commodity Summaries Indium」World Refinery Productionの日本生産分

2) 財務省貿易統計、輸入・輸出量は塊・粉・くずの値。

※塊・粉・くずの輸出の多くがITOターゲットと見られるが、Ge、V、Ga等を含む値であるため0とした。

3) 工業レアメタルNo.122~131、(No.131 P122 インジウムの需要推定②リサイクル品及び①需要量)

※インジウムに係るHSコードが一つしかなく、地金の輸入と再生地金の原料となるスクラップの輸入がひとくりにされているため、一部二重計上されている可能性がある。

※需要中、「その他」の内訳は参考値(その他内訳の小計とITOターゲットの合計値が国内消費合計値と一致しない場合がある)。

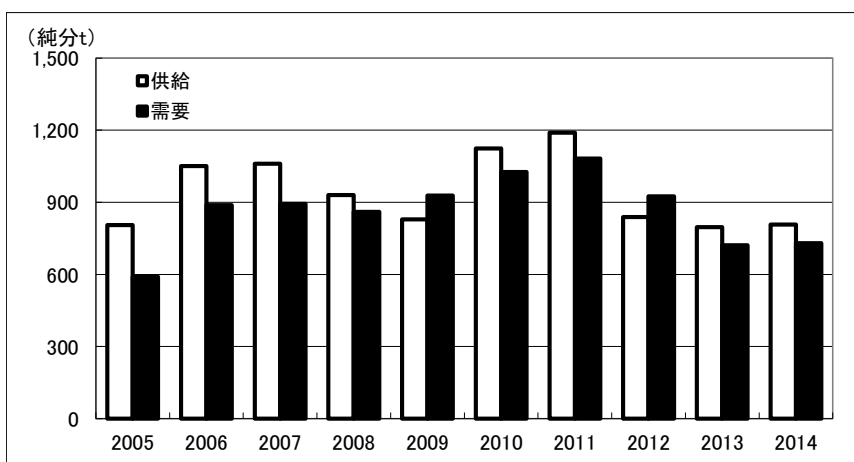


図 1-2 インジウムの国内需給

2. 輸入動向

2-1. 輸入動向

インジウムの輸入数量を表 2-1、図 2-1 に示す。

2014 年の輸入量は前年比 103%と微増であった。輸入されるインジウムの多くは海外に出荷された ITO ターゲットの使用済返却分ならびに海外工場で発生する工程内スクラップの回収分であるが、2011 年に発生した東日本大震災以降、海外市場における日本のターゲットメーカーのシェアが低下し、使用済ターゲットならびに海外工場で発生する工程内スクラップの回収量も縮小している。一部、回収された使用済ターゲット以外に新地金の輸入もある。

表 2-1 インジウムの輸入数量

			単位:純分t										
			2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	14/13比
素材	塊・粉・くず	輸入	422	434	368	342	215	417	494	171	161	166	103%

出典:財務省貿易統計

※素材は塊・粉・くずによる。

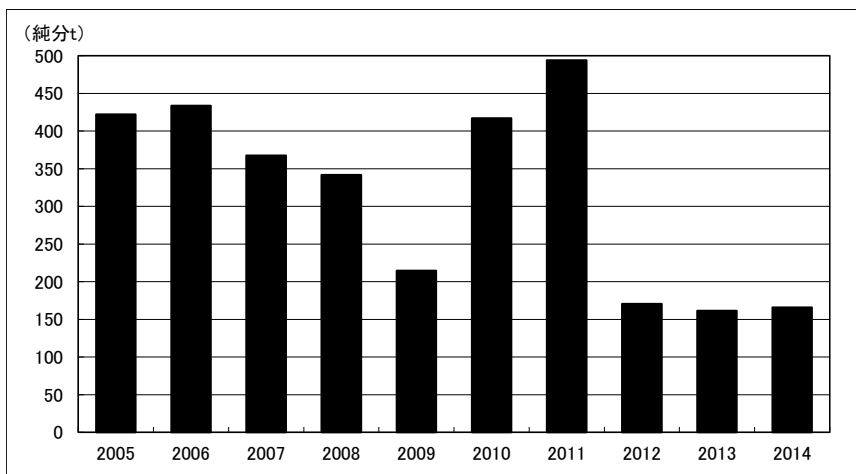


図 2-1 インジウムの輸入数量

2-2 輸入相手国

インジウム(塊・粉・くず)の輸入相手国を表 2-2、図 2-2 に示す。相手国のうち、韓国、台湾、中国は ITO ターゲットメーカーの海外拠点の後加工工場から回収されたスクラップや、ユーザーから回収された使用済ターゲットが中心であり、カナダ、英国、ペルー、米国、ラオスからは新地金が入ってくる。カナダには資源大手で世界最大級の亜鉛メーカーである Teck Resources Limited があり、パイプロとしてインジウムを生産している。

最大の輸入相手国である韓国からの輸入量が 2012 年に半減した後、2014 年は 76t と 2011 年の 37% の水準にあるが、これは震災の影響と韓国の ITO ターゲット国産化の中で、ターゲットメーカーの海外拠点の後加工工場やユーザーからの ITO ターゲット回収量が縮小したためと考えられる。

Fanya が開設され、中国を主体とする生産者が、条件の良い Fanya にインジウムを売却したため、2012 年中国の輸出は激減した。

表 2-2 インジウム 塊・粉・くずの輸入相手国

		単位:純分t											
		2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	14/13比	構成比
輸入	韓国	37	116	231	226	132	133	205	93	77	76	99%	46%
	カナダ	30	44	34	39	6	34	54	28	32	31	98%	19%
	台湾	21	25	29	17	16	19	22	12	23	26	111%	16%
	英国	0	0	0	0	8	45	63	4	11	19	176%	11%
	ベルギー	-	-	0	0	-	-	0	-	-	5	-	3%
	ペルー	2	-	-	0	0	1	7	9	6	5	89%	3%
	中国	296	240	67	57	39	159	124	8	3	1	44%	1%
	ラオス	-	-	-	0	3	12	6	2	3	1	19%	0%
	その他	36	9	7	2	9	15	13	15	7	1	22%	1%
	合計	422	434	368	342	215	417	494	171	161	166	103%	100%

出典:財務省貿易統計

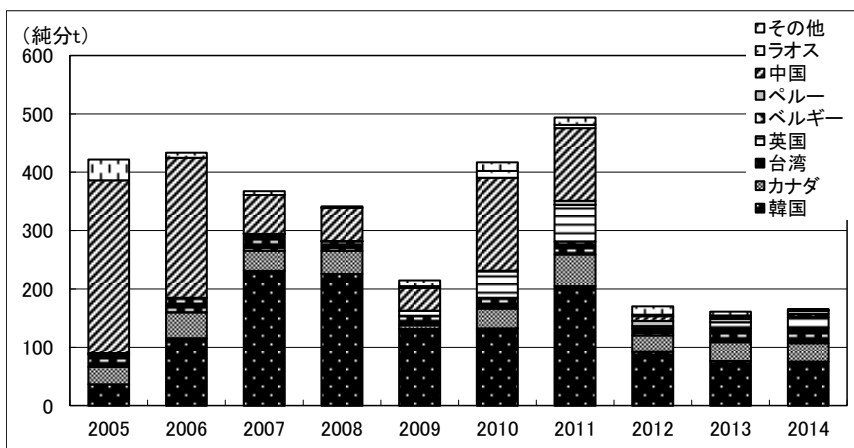


図 2-2 インジウム 塊・粉・くずの輸入相手国

2-3.輸入価格

インジウムの塊・粉・くずの平均輸入価格を表 2-3、平均輸入価格を図 2-3 に示す。輸入価格は 2014 年前年比 124%、645\$/kg であったが、中国の Fanya にインジウムの在庫が積み上がっていることから、中国投機マネーの影響が輸入価格にも表れた可能性がある。一方で、輸入インジウムの多くは回収された ITO ターゲットであり、インジウム地金相場の影響はあまり受けないとの見方もある。

表 2-3 インジウムの平均輸入価格

		2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	14/13比
素材	塊・粉・くず 輸入	924	823	639	532	370	532	669	500	519	645	124%

出典：財務省貿易統計

※輸入価格は貿易統計の貿易額を財務省による年間平均為替レートにより米ドルベースに換算し、年間平均価格を示した。

※2015年8月の財務省貿易統計貿易額を同月平均為替レートで換算すると335.3\$/kgとなり、現状の著しい価格下落を示す。

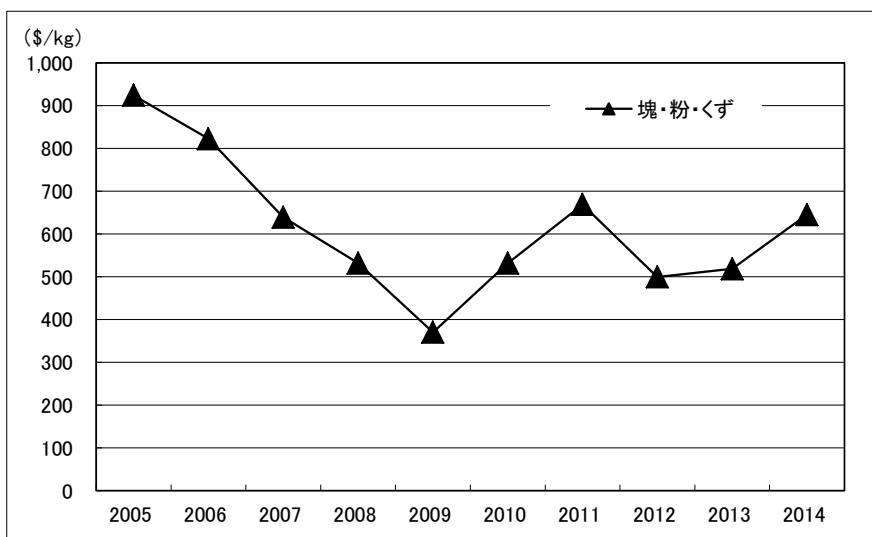


図 2-3 インジウムの平均輸入価格

3.リサイクル

TVやパソコンなど最終製品からのインジウムの回収・リサイクルは行われていない。現在はITOターゲットメーカーがユーザーから回収する使用済ターゲットがリサイクルの中心である。2014年のインジウムのリサイクル率は表3の通り71%と推計される。相場が一定の水準以下になるとリサイクルは成立しないとされており、相場下落次第では、リサイクルの停止、企業がリサイクル事業から撤退する可能性がある。

ガラスやフィルムにITO膜を成膜する際、スパッタ装置にはITOが付着するが、最近になってITOターゲットメーカーの中にはこれを回収し再利用しようという動きもある。

リサイクル率	$= (\text{リサイクル量}) / (\text{見掛消費})$
見掛消費	$= (\text{国内発生量}) + (\text{素材の輸入量}) - (\text{素材の輸出量})$

※素材は塊・粉・くずの合計値

※ガリウム、インジウムのように工程スクラップのリサイクルが供給の主要な部分を占める鉱種は、工程内からの回収量をリサイクル量とした。

※国内発生量には、リサイクル量及び製錬残渣等から回収された量を含む。インジウムの場合には、リサイクル量と亜鉛精錬副産物からの新地金生産量を含む。

表3 インジウムのリサイクル率

単位: 純分t

区分	内訳		2010	2011	2012	2013	2014
見掛消費量	国内発生	新地金 ¹⁾	70	70	71	72	72
		再生地金 ²⁾	636	625	597	563	569
	素材(輸入-輸出) ³⁾		417	494	171	161	166
	合計①		1,123	1,189	839	796	807
リサイクル量(再生地金②)			636	625	597	563	569
リサイクル率(②/①)			57%	53%	71%	71%	71%

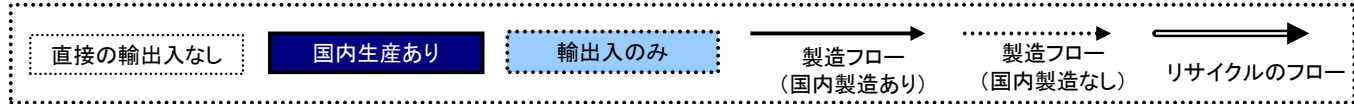
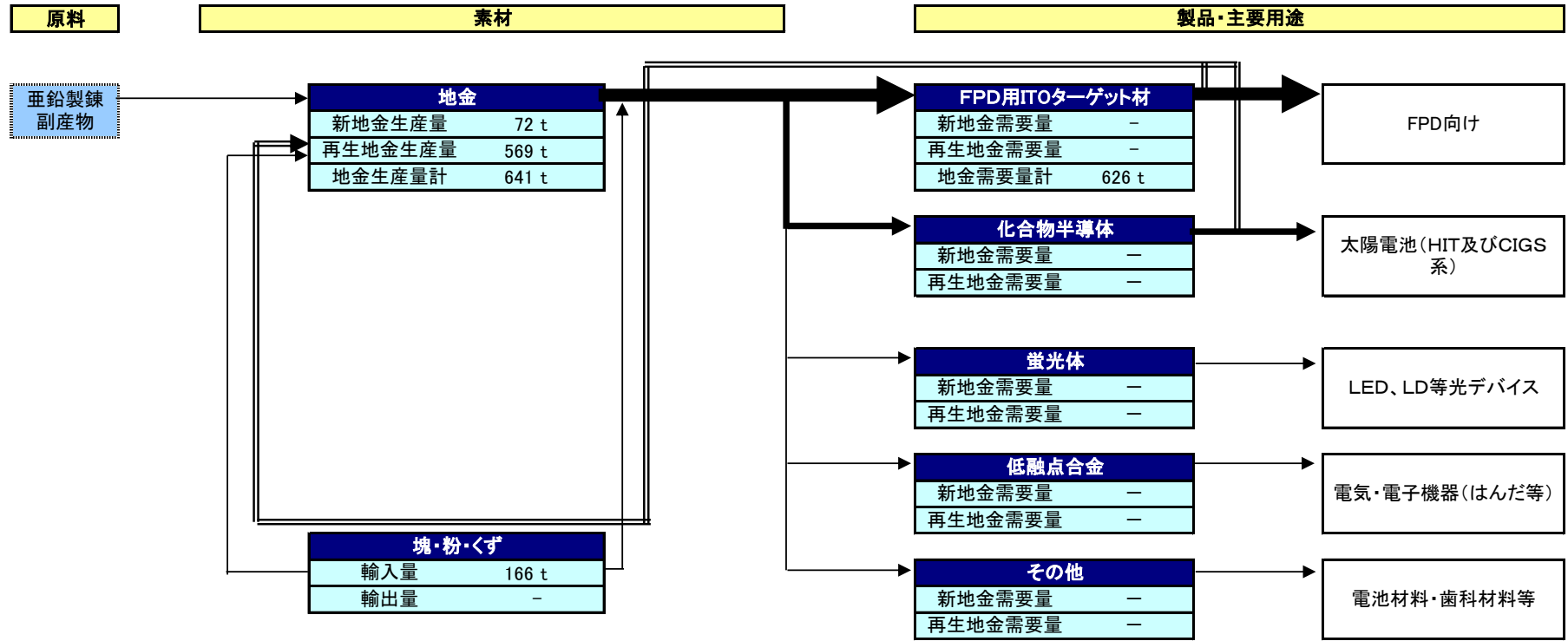
出典: 1) United States Geological Survey「Mineral Commodity Summaries Indium」
World Refinery Productionの日本生産分

2) 工業レアメタルNo.131 2015、P122「インジウムの需要推定②リサイクル品及び①需要量」

3) 財務省貿易統計、輸出はGe,V,Ga,Hf,In,Nb,Reを含む参考値であるため、ここではゼロとした

4.マテリアルフロー

インジウムのマテリアルフロー(2014)



※製品の需要量=国内で生産又は国内に輸入された素材の需要量であり、製品の輸出入量は考慮していない。